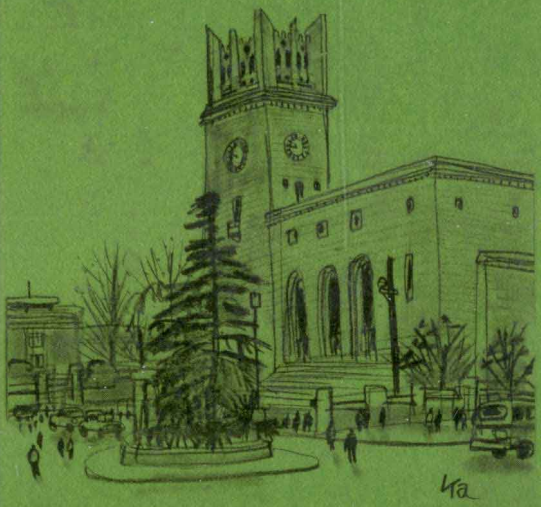


青春の門

五木寛之

自立篇 上

講談社

青春の門　第二部　自立篇　上

著　者　五木寛之

発行者　野間省一

発行所　株式会社　講談社
東京都文京区音羽二―一二―二一
〒一一二　振替　東京　三九三〇
電話東京（〇三）九四五―一一一一（大代表）

印刷所　豊国印刷株式会社

製本所　藤沢製本株式会社

第一刷発行　昭和四十六年十一月　三十日
第十七刷発行　昭和四十九年　五月　二十日

©五木寛之　昭和四十六年　落丁本・乱丁本はお取り替えいたします。

定価は箱に表示してあります。　（文2）　Printed in Japan

目次

東京の空の下で　5
最初の仲間　17
青ざめた娘　66
五月の夜の乳房　78
売血者の群れ　101
新宿風月堂界隈　131
奇妙な誘い　148
女に賭ける　173
禁じられた渕に　185

織江との再会　231
燃える季節　254
雨の中の男たち　264

装幀　村山豊夫
題字　菅　甘林
表紙絵　さしえ　風間　完

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

青春の門

自立篇　上

東京の空の下で

伊吹信介は列車がホームに停止する鈍い衝撃で目をさました。彼は二、三度まばたきして顔をあげ、あわてて窓の外を眺めた。

〈どこだろう？〉

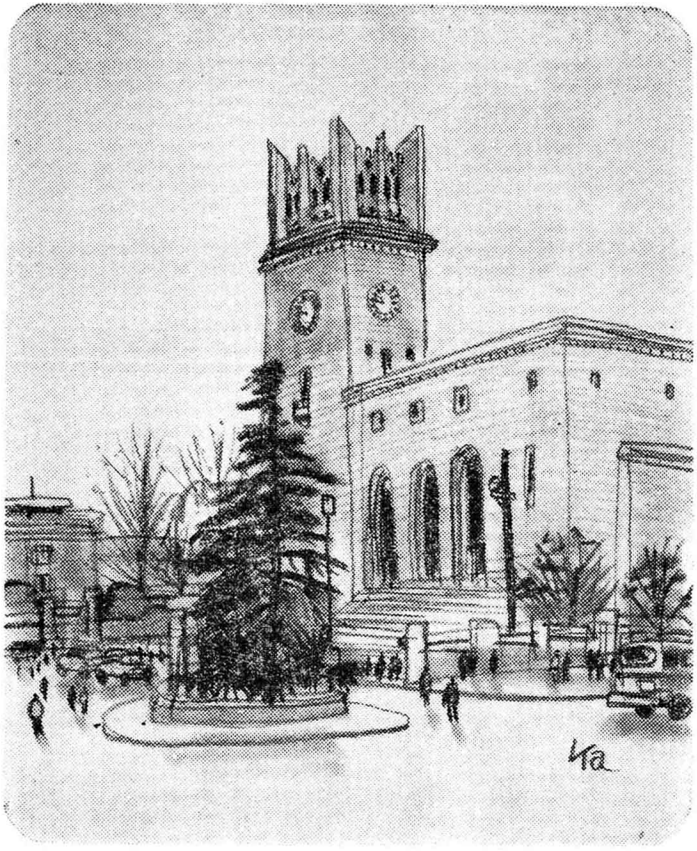
長いホームの柱のむこうに赤い建物の側面が見える。沢山の群衆がホームを行きかい、スピーカーがけたたましく早口で叫んでいた。

「やれやれ、やっと着いたか」

と、前の席に坐っていた中年の男が信介に笑いかけながら呟いた。博多からずっと一緒にやってきた薬品会社のセールスマンだとかいう男だった。

「疲れた。なにしろ丸一昼夜以上も坐りずくめだからなあ」

その男は大きく背のびをすると、いかにも旅なれた様子で周囲の乗客のあわただしげなざわめきを無視したまま、ゆっくりと煙草に火をつけた。
「東京に着いたとですか」
と、信介は目をこすりながらきいた。
「ああ。東京だよ。見ろ、歩いている連中の顔つきが尖ってるからすぐにわかる。九州とはこれだけ人間の顔がちがうんだからなあ」
セールスマンは皮肉な口調で言うと、信介の膝を片手で叩いた。
「まあ精々がんばって勉強してくれ、早稲田の学生さん。同じ列車に乗りあわせたのも何かの縁だろう。ほら、名刺をあげておくから近くにでも来たら社のほうへ電話でもくれよ。もっともひと月の半分は地方へ出て、いないことが多いがね」
「ありがとう」
信介はもらった名刺を大切に内ポケットにしまい込んだ。これまで名刺などというものを人からもらったことは一度もない。それに東京へ着いてからの最初の知り合いができたのだ。信介は何か急に心強い気がして勢いよく座席から立ち上った。網棚からボストン・バッグをおろし、バスケットシューズの紐を結びなおした。
〈おれはいま東京にいる――〉
なぜかそのことが嘘のような気がしてならない。入学試験を受けに前に上京した時は、同級の仲間や先輩たちと一緒だった。だが今は全くの自分ひとりだ。そして現在の信介はすでに塙竜五郎や母親



のタエや、筑豊の土地とも切りはなされた、もうどこにも帰る所のない一人の大学生なのである。

「お先に」

と、信介は何かもの憂げな表情で煙草をふかしながらぼんやり考え込んでいるセールスマンに頭をさげ、座席を離れた。その男は、ああ、と小さくうなずき、片手をちょっとあげただけだった。

ホームに降りると、外の空気がひどく冷たく感じられた。まだ午前九時になっていない薄曇りの朝である。信介はホームの掲示板を首を反らせて眺め、山手線の表示をたどって国電のホームに向かった。

ラッシュの時間はどうやら終りかけているらしいが、まだ恐ろしいほどの人の渦だった。出社時間に滑り込もうとするのか、電車のドアから弾かれたように飛び出すと、階段を髪をふり乱して駆けおりる男たちがいた。腕時計のネジを巻きながら、小走りに高いヒールを鳴らしてすり抜けて行く娘たち。目をつりあげて喘ぎながら、カバンを胸に抱きしめて押し出されてくる初老の男の額に、汗の粒が光っている。

〈東京だな、これが〉

信介はしばらくぼんやりとホームの端からその激しい人間の流れを眺めていた。それは彼がはじめて見る大都会の朝の表情だった。

〈なにもかも動いている〉

と、信介は呟いた。素早く、そして激烈に、人間が駆け、電車が間断なく発着し、スピーカーが叫び、なにもかもが前のめりになって突っ走ろうとしている。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

〈おれは今日からここの街の人間になるのだ〉

信介はぶつかりながら流れて行く人の波をみつめて、そう考えた。

あれだけ世話になった塙竜五郎のところを、彼は置手紙一本で出てきた。もう意地でも筑豊へは帰れない。そして母親のタエは軽い一握りの骨になってしまっている。彼の生きる場所は、いま現在、ボストン・バッグをかかえて立っているこの東京の土地以外にはなかった。

山手線の褐色の電車が、火花を散らしながらホームに滑り込んできて、再び活気のある人間の渦を吐き出した。

〈ところで、まず、どこへ行こう?〉

信介は大学の学生証と、それに移動証明の届出用紙だけを持って東京へやってきたのだった。手持ちの現金はすでに四千円を切れている。泊る場所の当てもなければ、さし当ってアルバイトで稼ぐにはどうすればよいかもわからない。

〈まず大学へ行ってみるか〉

早稲田へ出るためには山手線を高田馬場で降りればよかった。そのことは受験の時におぼえている。

信介は博多から東京都区内までの乗車券をにぎりしめ、ボストン・バッグを抱えて滑り込んできた電車に乗った。東京駅で大半の乗客を吐き出したため、車内はすいていた。信介は連結部に近い座席に腰をおろすと、向かい側のガラス窓に映る自分の恰好を、さりげなく観察しはじめた。

足もとはなかなか軽快に見える。大枚六百円を投じて岩田屋デパートで買ったバスケットシューズ

が、くっきりと白かった。学生服のボタンが一つとれている。頭は五分刈りがやや伸びかかって、まだ分けたり、なでつけたりするには早すぎる中途半端な長さだ。やや青白い頬の落ちた顔。膝の上のボストン・バッグは、竜五郎のおさがりで角がすれてほころびかかっている。中には英和辞典と、下着二、三枚と、そして古い軍隊用の飯盒(はんごう)がはいっているだけだった。そのほかには大学ノートが一冊と、食べかけの小倉パンぐらいなものである。

十八歳の信介は、いまの自分の立場を、ひどく幸福な人間のように感じていた。少なくとも自分は日本の中心地にやってきて、自分以外の家族や肉親の生活を心配することなしに生きて行くことができるのだ。そう思うと、さし当りの宿や仕事への不安など消し飛んでしまうのだった。

〈いざとなれば野良犬を殺して食ってでも生きられる〉

そう考えて、信介は思わず独りで声を出さずに笑った。向かいに坐っている婦人が、けげんな表情で彼を眺めて眉をひそめた。電車は車体をきしませながら走り続けた。

高田馬場駅で降りると、駅前に黒い学生服の行列が見えた。大学へのスクールバスに乗る学生たちの列だった。

さすがに新入生らしい青年が目立っている。彼らは鋭く先の尖った角帽を律義に頭にのせ、新しいカバンをさげている者も多かった。中には明るい服を着た女子学生らしい姿もあった。

信介はためらうことなくその列を無視し、都電の路線にそって早稲田の方角へ歩きだした。バスに乗らずに歩いている学生もかなりいた。両側に並ぶ商店の前の歩道を、黒っぽい学生たちの流れが大

学のほうへ動いて行く。信介もその流れにまじって、ボストン・バッグを抱えたまま歩いた。
戸塚のロータリーのあたりを過ぎると、町並みはいかにも学生街らしい感じになり、古本屋や、大学の制服や角帽を飾った店が目立ってくる。
〈角帽はいくらするのだろう？〉
信介は何となく新入生たちの晴れがましそうな角帽姿が、子供っぽいものに思えて、心の中で彼らを嘲笑していた。だが、それでいながら、やはり自分が角帽をかぶっていないことが何となく気がひけた。
〈おれならもっとうまくかぶってみせるぞ〉
しかし、店頭に飾ってある新しい角帽の値段を見て、彼は帽子をかぶることをあきらめた。今のところは十円の金でも大事に長もちさせなければならぬ大事な時だと思われたからである。
戸塚の交番の前から大学の裏門へ通じる細い露地へ折れると、左右の商店はほとんど学生のための店になった。店頭のショーウインドウには、早大のバッジや文学部や政経や商学部の海老茶のバッジなどが並んでいた。信介はそれを見て、ちょっとがっかりした。彼はそれらのバッジは、学生証を確かめた上で、大学の事務局が厳かに一個ずつ手渡してくれるものだとばかり思っていたのである。それが金さえ払えば、店頭で誰にでも買えるものだと思うと、彼はなにか裏切られたような気持になった。
左手の体育館の前を過ぎて階段を降りる手前に、二、三人の靴磨きがいた。驚いたことに、それはみんな早稲田の学生らしかった。

〈若者よ、体をきたえておけ！　学友諸君、靴を磨いて行け！〉
などというビラを張っているのもいた。
〈学割十円〉
とだけ書いてあるのもいる。そして派手なコートのポケットに手を突っ込んだ金のありそうな若い学生が一人、煙草をくわえたまま同年輩の学生に靴を磨かせていた。
〈こんなアルバイトもあるんだな。なるほど〉
信介は感心して道路の端に立ったまま、それを眺めていた。客のこない学生靴磨きの一人は、難かしい顔をして赤帯の岩波文庫に読みふけっていた。
「おい、君」
と、一人の靴磨きの学生が手招きした。信介は自分のうしろを振り返ったが誰もいなかった。靴磨きの学生はどうやら彼を呼んでいるらしかった。
「ぼくですか」
と、信介は近づいて行って言った。相手は茶色のトックリのスウェーターを着て、黒いズボンをはいた老けた感じの男だった。頭に鳥打帽をのせ、なた豆煙管をくわえてスパスパやっているのだ。あまり学生らしからざる恰好だが、私立の大学にはこんなのもいるのだろうと信介は思った。
「君を呼んだのさ。靴をここにのせたまえ。磨いてやる」
「磨くって、ぼくのはバスケットシューズですよ」
「なるほど。じゃあ、白く塗ってやろう。十円でいい」

「買ったばかりですからいいです」
「そうか」
その青年はがっかりしたように煙管を敷石に叩きつけ、詰問するような口調で言った。
「そこに立ってじろじろ見てたのは、じゃあ何のためかね」
「面白いアルバイトだと思って見てたんです。あんたも、やっぱり早稲田の学生ですか」
「そうは見えないか」
その青年は、欠けた前歯をむき出して笑った。笑うと人なつっこい、暖か味のある顔になった。
「おれは劇団ベリョースカの演出部にいる緒方というもんだ。教育学部だが、そっちのほうは関係ない。君は新入生か」
「そうです。文学部です」
「九州だろ。言葉ですぐわかる」
緒方と名乗った学生は、立ち上ると信介の肩を叩いて、
「ちょっと代って店番をやっててくれ。おれ、ちょっと部室へ連絡することがあるのを思い出した。黒は十円、茶色は十五円。いいな。クリームはなるだけ少なく、伸ばして使え。じゃあ頼むぞ。すぐ帰ってくるから」
信介が面くらってあっけにとられている間に、緒方はたちまち階段を校内へ駆けおりて行った。信介は覚悟をきめて、ボストン・バッグを横におき、道路の上に置かれた木の箱の上に坐った。
〈おかしな人だ〉

と、信介は前歯の一本欠けた、どこか孫悟空に似た顔つきの緒方のことを思って苦笑した。東京へ着いて第一日目に、母校の裏門の前で靴磨きをしようとは考えてもみなかったことだった。彼は膝の上に両手を組んで、目の前を流れて行く学生たちの脚を不思議な気持で眺めながら坐っていた。

劇団ベリョースカの演出部員だと名乗った緒方という学生は、一時間あまりたって、ようやくもどってきた。

「やあ、すまん、すまん」

彼は頭をかきながら、信介の前の空きかんをのぞき込むと、ヒュウと口笛を吹いて、

「ほう。やっとるねえ」

「五人磨きましたよ」

信介は立ち上りながら言った。彼が坐っている間に、研究室の助手らしい男をふくめて、五人の客が靴を磨いて行ったのだった。

「きみには靴磨きの才能があるらしい」

緒方は空きかんの中の十円銅貨をつまみあげると、二個を左手にのせ、少し考えてもう一個つけ加えて信介のほうに差し出した。

「なんですか、これ」

「利益は折半。五円釣りよこせ」

「いいですよ、ぼくは」

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.